

第35回国際養蜂会議に 参加して

井上 凱夫・江澤 真・
中村 純

アントワープ大会とミツバチ文化

1997年9月1日より6日まで、ベルギー・アントワープにおいて、第35回国際養蜂会議100年記念大会は開かれた。1897年に同じベルギーのブリュッセルに始まった会議は、幾多の歴史の嵐に中断されつつも、引き継がれて100年を迎えることとなった。近年欧州大陸と他の地域で、交互に2年毎、開かれていた会議は、100年を記念して、第34回ローザンヌ大会（スイス）に続いて、ヨーロッパでの開催となった。

私が大会に参加したのは1977年、第26回アデレード大会（オーストラリア）が最初で、第30回名古屋大会（日本-1985）、第31回ワルシャワ大会（ポーランド-1987）、第32回リオ・デ・ジャネイロ大会（ブラジル-1989）、第33回北京大会（中華人民共和国-1993）に続いて、今回で6回目となった。機会に恵まれれば、積極的に参加し、最終日まで参加する。言葉や生活に不自由することは、言を待たないが、その国の養蜂やミツバチを見たり、新しい養蜂器具やミツバチ産品に出会いたいの一念で、動き回り、カメラでとりまくるのが、私の参加スタイルである。そんなに新しい発見や、出会いがあるわけではないが、それは帰国してから考えればよいと思っている。いつも、多くの方に助けられての行動で感謝の一言である。奇異に感ずる人もおられるかも知れないが、これが平成8年8月8日-8.8.8。（8が3つでみつばち）で、兄（敦夫）と共に、愛知県瀬戸市に養蜂博物館を開くに至った原動力となって



左から図1 大会場入り口に飾られたセント・アンブローゼ像（藤製） 図2 彫像巣箱（ドイツ・ワイマール養蜂博物館展）と筆者

いることは、間違いない。

私自身は、一蜂人に過ぎないので、活動は展示会場が主体である。今大会では、62のスタンドが展開されていた。

人間とミツバチの関わりから生まれる文化—それを、ミツバチ文化と呼びたい。ミツバチ文化の主役は、あくまでミツバチである。ミツバチをモチーフにデザインされたものには、ことのほか、興味をそそられる。

今大会で、会議場入り口で私たちを出迎えてくれた、藤で編まれたセント・アンブローゼ像（図1）や、ドイツのワイマール養蜂博物館より特別展示された彫像巣箱（図2）は、ミツバチ文化の最たるものと考えている。教育展示会場では、大会100年を記念して、ミツバチコイン、メダル展示があり、そのすばらしさに圧倒された。ミツバチ切手展も開かれていた。ブラジル、中国では、これらの展示は一切なく、物売りだけに狂奔しているのを見て、アピモンディアの精神は、どこにいったのかと淋しい思い



図3 いろいろな形のスケップや丸太巣箱—ベルギー・ティルフ養蜂博物館



図4 巨大な蜜巣絞り機（国際アピモンディア養蜂博物館）

をしたものである。

一日研修旅行で、ティルフ養蜂博物館を訪問できたのは、幸いであった。また、世界でただ一つの国際アピモンディア養蜂博物館（ベルギー・メッヘレン）にも訪れることができた。これらの博物館に共通して言えることは、数千年にわたる長い養蜂の歴史である。

展示されたいろいろな形のスケップ（ワラ製巣箱）や丸太巣箱（図3）、タル製離蜜機や蜜巣圧搾機（図4）から、“蜂蜜の歴史は、人類の歴史”というイギリスの諺が、そのものであると確信できた。実用性の中に、遊びの世界が存在し、見ていて実に楽しい。

ミツバチ文化とは、ミツバチを愛する人間の心の現れであり、ミツバチを友として、この上なく愛することから生まれる文化といえる。英語に置き換えれば Bee (Api) Culture すなわち養蜂となることに、不思議な思いをする今日この頃である。

（井上 凱夫）

〒463-0011 名古屋市守山区小幡北山 2773-162 (株) 全日本ローヤルゼリーセンター)

ベルギーのハチミツビール

ベルギーでの第35回アピモンディアは飲み助の私にとって初めての海外で、異国への不安とビールへの期待とを持ちながら参加したのである。オランダからベルギーのブリュセルに会議の前々日に入り、まず異国の町とビールを探索しながらビール専門店を見つけ、早速ビールを堪能してから、列車で会場であるアントワープへ向かったのである。会場はアントワープ駅の横の動物園に面した会議場と駅前広場に大き



図5 ハチミツビールのラベル

なテントを張った各国の展示場とで駅前にはアピモンディアに参加する人々で一杯であった。会場の受付けも、参加者が多くコンピューターもパンクして受付け当日は相当の混雑であった。会議のミツバチ関係の内容については専門家の人々にお任せして、私は各国の展示場と研修旅行のハチミツビール醸造場見学を楽しみに参加したのである。

ベルギーのビールは中世に修道院の僧により造り始めたのが発端で、ジャン1世がビールを奨励したことも手伝って、ベルギー各地でビール造りが盛んになり、今では約540社の醸造元があり、ビールの種類も400種類以上ものビールが生産されている（図5）。この400種類以上もの中には、特徴あるものとして修道院内で醸造されトラピストビールと付けられる唯一のビールはオルヴァ Orval、ウエストヴレターレン Westveleteren、ウエストマル Westmalle、シメイ Chimay、ロッシュホル Rochefort の五種類でアルコール度数も8%前後と高く、凝縮したヘビーな味わいで、苦味も強いものである。ランビーク Lambic ビールの様な、自然の酵母とホップを使い、ビールの古酒として樽で三年以上も自然発酵させたビールや、この古酒にランビークの新酒を合わせ罎の中で二次発酵させシャンペンと同格と自負されている自然発酵ビールのグーズ Gueuze ビールなど格調高いビールもある。さらに、グーズビールを黒砂糖で仕上げたやや甘口のファロ Faro ビールや変

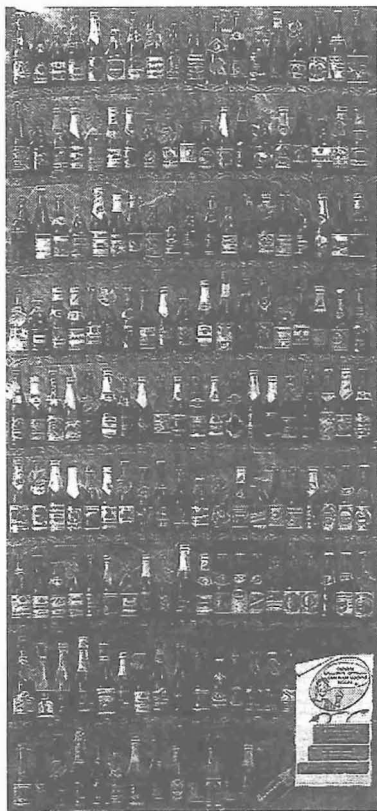


図6 ベルギービールのポスター

わったビールとして若いランビークの樽の中にフルーツを入れ造るフルーティーなビールの代表はサクランボからのクリイーク Kriek ビールがある。さらに小麦を使用した不透明な白ビールのブランシュ Blanches, ルーヴァン Louvain があり、大麦の培煎の強さにより赤ビールのルージュ Rouges や黒ビールのブリュンヌ Brunes などのカラフルなビールもある。しかし、一般にベルギーで好まれているビールは市場の75%を占めるピルス Pils, ルーヴァン Louvain, ジュピーユ Jupille, ハークト Haacht, アルケン Alken で製造される純度の低い麦芽から大量生産されアルコール度数も5%前後のピルスビールであるが、日本のビールよりも全般にアルコール度数は高いものばかりであった。

ビールは原料の種類や大麦の麦芽した培煎の強さによりビールの色が決まり、澱粉を糖化させ、この糖分量により甘味とアルコール度が決

定され、ホップ等により苦味や芳香が添加され、酵母で糖分をアルコールと炭酸ガスに発酵させ、発酵温度により室温の上面と低温の下面発酵と異なり、これらのビール製造条件の、それぞれを変えることにより種々のビールが造られるのである。

TECHNICAL VISITS の場所はフランス国境に近い Binche の町の“La Binchoise”と言う地ビールの代表的醸造場で“Biere des Ours”と言うハチミツビールの試飲と見学をしたのである。このビールは、麦芽とホップで上面自然発酵させハチミツを添加し、壺に詰めてから二次発酵させた生ビールでアルコール度数も8.5%と高いが非常に飲み口の良いモルトビールであった。ラベルの中央の黄色部分は蜂の巣である(図6)。

日本でも地ビールが認可され、色々な地域で種々なビールが生産されるだろうが、ハチミツビールも出来るのではないだろうか。また、ミードも期待したい。(江澤 真)

(〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1

玉川大学ミツバチ科学研究施設)

アントワープ大会とインターネット

一足遅れて会場入りした開会式では、すでにセレモニーの部分が終わりにかけていて、壇上のスクリーンにはコンピュータの画面が投影されていた(図7)。それがアビモンディアのホームページの紹介であろうことは、事前に予測していたのだが、まさか開会式で大々的に取り上げるほどのこととは考えていなかったもので、驚かされた。



図7 ステージ上に映し出されたホームページ

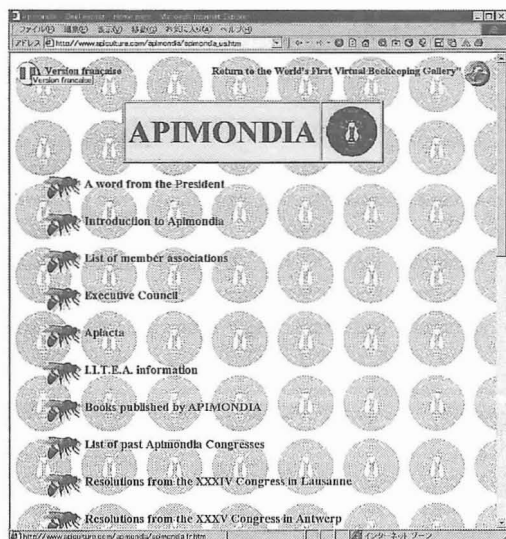


図8 アピモンディアのホームページ

インターネットは、これまでのパソコン通信などに較べて国内外の情報をより手軽に、かつ文字情報に加えて、画像も簡単に取り出せるようになったという利点を活かして急速に普及している。養蜂におけるコンピュータの利用という経営管理などをイメージしがちだったが、近年はインターネット上にホームページを公開して、顧客への情報提供や、通信を通じての販売取引を行っているところも急増している。アピモンディアのように、世界各地から情報を求めて来る人々がいるような組織の場合、そのすべてを1:1の手紙やFAXのやりとりで行うよりは、情報を欲しい人がインターネットでアピモンディアのホームページにアクセスして「勝手に」情報を拾ってくれる方が効率がいい。すでに時代を先取りしたというには遅すぎるきらいもあるが、今回のアントワープ大会のひとつの目玉は、アピモンディアのホームページの公開でもあった。

閉会式では会議の決議が報告されたが、アピモンディアの広報活動の一環としてホームページを充実させるために、これを管理するいわゆるウェブマスターと呼ばれるポストを用意することにしたという条項がある。今後はその人材を中心に拡充が図られるのであろう。

アピモンディアのホームページ (http://www.apiservices.com/apimondia/apimondia_us.htm)



図9 次回の大会案内はまだ準備中

www.apiservices.com/apimondia/apimondia_us.htm) の構成については別の機会に詳しく触れたいが、図8に示すようなページから、いくつかの項目へ移動できる。メンバー国の養蜂事情も簡単にまとめて紹介されており、また次回の案内も掲載される予定である(図9)。

しかし、このような広報活動は、情報の収集と、思ったよりも大変そうなホームページの更新管理作業という新たな仕事を増やすだけかも知れない。コンピュータは決して全能ではなく、今のところ常に信頼に足るものとは呼べないし、結局、アピモンディアの情報を欲する人すべてがコンピュータの利用者にはなりえないことから、アピモンディアは、インターネット以外の広報活動も放棄はできない。したがって単純には仕事が倍加することになるだろう。しかも、インターネットの方はそれなりの専門知識をも必要とする活動となる。

いずれにしてもこれでインターネットが利用されるようにはなるのだろうが、その象徴的な会議であったはずのアントワープ大会で、受付用のオンラインシステムがオーバーヒートしてダウンするなど、先行きの不安ものぞかせながらの出発となったのである。(中村 純)

(〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1

玉川大学ミツバチ科学研究施設)